瀬尾　育生
『二〇世紀の虫――〈解読不能なもの〉について』

助　廣　　剛

読みにくい本である。難解とは違う。難解と明解とは共存出来る筈であって，この本の難しさは，明解につながるものを，意図してのことかどうか断ち切っているために生じている。理論の書のようでいて論証の性格を持たない書き方が，この事と裏腹になっていよう。読みながら理解を深めつつ，という並の行き方をするにはかなりの我慢が要る。忍耐するだけでは駄目かもしれない。不思議は，引用文の所へたどり着くと，あたかも鬱蒼としたドイツの森を歩いていて思いがけず Lichtung に出た時のような，明るさと解放を感ずる事である。地の文と引用との間のこの違いは何か。難解とは異なると言ったこの本の読みにくさは，この違いを知る事によって，何とかこなす手立てが見つかるかもしれない。

読みにくさの原因を探ると，先ず見えて来るのが語彙の分りにくさである。著者が独自の考えを載せて文中にちりばめる様々な言葉が，その意図の強さのせいであろう，他人には特異なものと感じさせる性質を持つために，あるものは一般に使われるものと違うニュアンスを含み，あるものは文中の様々な関連からは充分に説明されなかったりする。そうした語彙にはキーワードと言ってよいものが少なからずあって，立論の基盤をなすものだから，分りにくさの元凶と言ってもよい。試みに一部分について簡単なコンコーダンスを作ってみた。すると著者はその類のキーワードを自明のものとして使っているらしいと分った。この本は四章からなり，それぞれが九から十五の節に分かれている。全体を紹介しようとすれば，ほとんど元の本と同じ紙数を要するだろう。要約は出来ない性質のものである。ここでは本の題名ともなっている第一章『二〇世紀の虫』十四節を対象にし，代表的な文例を観察のために用いて，私の書評文の目的を果たしたいと思う。

その第一・二節のタイトルは《意識の絶対的な小ささについて》・《見知っているがわからないもの》であり，カフカの『巣穴』(Der Bau) を扱っている。この二つの節を特徴づけている語彙は〈意識〉である。第一章の中ではこの二節にだけ，二十回以上も使われる。この〈意識〉という言葉は一・二節の発想の根であり幹であり，またすでにほとんど葉や花や実でさえあって，全体に対して支配的である。

巣穴を作り上げたこの動物……の意識にはある欠損した部分があり (10 頁)

動物の意識とは何か。この本での使い方はまるで人間に対して使っているかのようで，ここでは著者はすでにカフカの術中に陥っている。と言って悪ければ，敢えてカフカの掌に乗っている。カフカの描出法のひとつの効果である。これに触発される思惟や語彙は，著

者の責任において，何らかの仕方でそれと一線を画するもの，何らかの意味で客観の視点を持つものでなくてはならない。

> 巣穴とその周辺に限定された意識しか持たないこの動物の意識は「小さい」。(10 頁)

「欠損」から「小さい」まで数行しか離れていない。意識が小さいのは欠損した部分があるためだというが，欠損があるのは狭い範囲に限定されているからだろうか。この小さな意識の動物は，

> 自分の意識を「小さい」と感じるほどには，彼の意識は大きいのだ。そしてそのわずかな大きさが彼の身の回りの世界を外部から統覚するような別の存在を思い描かせ，その存在に対するたえまない怯えを彼に注ぎこむ。(11 頁)

この動物の意識は限定を超える能力を持ち，外部の大きな存在を恐怖として知る。彼は

> 自分の意識の「小ささ」を意識し，そのために自分より「大きな」意識に怯え続ける，いわば「絶対的に小さな」ものである意識，「絶対的に限定された」ものである視野。彼の根源的な怯えは彼の意識のこの「絶対的な小ささ」からやってくる。……この動物が自らの意識の「小ささ」を知っているということが，その欠損部分に正体不明の敵を描きださせているのだ。(11 頁)

意識が小さいのは欠損部分があるからで，そのことの自覚がその欠損部分に正体不明の敵を描き出させる，という展開の途中に，「いわば」のついた「絶対的に小さな」が挟まれている。「いわば」は内容に乏しい言葉になっている，あるいはこの一語のために前後に展開されている論理が希薄なものに成り下がっている。絶対的という形容辞がどこから来るかを著者の文に沿ってたずねても無駄であって，曰く言いがたいニュアンスを，相応しい言葉が見つからないまま「絶対的」という語彙へとずれたという印象がある。「絶対的に小さな」の「絶対的に」には「根源的な怯え」の「根源的な」が対応している。共に究極的なもの，限界領域にあるものを表現しようとする場合に使いたくなる語彙であって，カフカの描写に誘われて人間の存在論の究極の議論に入り込み，言語表現の明瞭と寓意表現の難解とが同居している小説世界にどう対処するか，という困難な課題に対して著者が採った手立てである。それは発想の始めから脳中にあったと考える方が事実に近いだろう。カフカの表現は寓意的である。著者はそれをさらに寓意的な語彙と論理の運びでなぞった。多分発想の線は一筋にしっかりと脳中に引かれているのだろう。しかし読者の目には，はっきりとは見えないその一筋の線の周辺に語彙が近似的に散在しているように映る。

ひとつ前の引用にすでに使われているが，〈意識〉に取って代わるように登場し，第一章の本当の主役らしい語彙が〈統覚〉である。「彼の身の回りの世界を外部から統覚する

……」というのが初出であって，一・二節で使われたあと一旦姿を消し，十一節に再登場すると最後まで頻繁に使われ，第一章の主役であることを明らかにし，この章の本当のテーマが〈統覚〉であることを教える。〈統覚〉が軸になっている文言を選んでみよう。始めの二つは一・二節にあり，3～16は十一節から終わりの十四節に至る，十数ページに及ぶ締めくくりの部分にある。

1. 彼の身の回りの世界を外部から統覚するような別の存在（11頁）
2. 人間はなぜ自分自身である存在・意識・統覚から迷い出て，別の意識，別の統覚のなかへ入ってゆくことができるのか，（11頁）
3. （カフカの）作品が「わからないこと」や「解釈不可能」，あるいは「統覚喪失」といったものをその作品の核心に算入していること（35頁）
4. 人間に可能な世界統覚とは別の，より拡大された統覚が，宗教的・倫理的な観念としてではなく実在するものとしてあらわれてくる。（35頁）
5. 一つの動物の中での二重の統覚の間の闘争（36頁）
6. 二〇世紀初頭に起こった統覚解体（37頁）
7. （リルケの《世界内面空間》）では世界の変容はもっぱら隠喩的に語られる。統覚解体は「個別」と「普遍」との照応関係が崩壊することを意味するが，（37頁）
8. 諸々の事物が対象として統覚されていたときには（38頁）
9. 詩的霊感や天使の呼びかけや分裂病的な異質な統覚が，（39頁）
10. 統覚解体が，不安が（39頁）
11. リルケの《世界内面空間》の中であたかも天使の呼び声や「存在」の発する声のように聞き取られている言葉は，カフカの寓意的な空間の中で，あの小動物の二重統覚がとめどなく産出する不安，まだ見ぬ巨大な敵が発するシュッシュッという音と別ものではない。（40頁）
12. 自らの意識を超えたところでそれを統覚しているような最後の統覚――誰でもないものの統覚（41頁）
13. 自分の統覚や諸々の他者の統覚を超えた最終的な統覚との合一（41頁）
14. カフカが作り出す身の回りの世界は外的統覚を欠いた「絶対的に小さなもの」だが，一九二〇年代前半のベルリンに渦巻いていたのはそれに対するさまざまな敵」たちの声，さまざまな問題群を最終的解決へと導く究極的な問題系列，「極端にに大きな意識」たち，ファシズムからコミュニズムにいたる，さまざまな世界観たちの発する声だった。（43頁）
15. 全体を統覚する「大きな意識」（43頁）
16. 世界全体を一視点から視野に収めるいくつもの巨大な統覚（43頁）

〈統覚〉を含む長短さまざまな文章を箇条書きにして，面白いことに気が付いた。本を読んでいる間は，〈統覚〉を始めとする独特な語彙に煩わされていたが，箇条書きにした

上で〈統覚〉を脳中の図に空欄とし，適当な語句を補って読むと，著者の言わんとするところがややはっきりと見えてくるのである。見えたものを元に逆算すると，〈統覚〉は名詞としては〈統一的な世界観あるいは世界感情〉と言い直してほとんど違和感がない。動詞としては〈統一的に世界を把える〉と言えば良いだろう。発想の独自性を強調する著者の思い入れが，〈統覚〉には込められているようだ。世界観というより，直感的な世界把握に似たある感情を，まさに生まれつつあるところで捉え命名しようとしているらしい。それは哲学的用法に限定されていず，というより限定を避けているらしく，むしろ詩的用法に近いと言うべきものである。普通は〈統覚〉にはライプニッツから親しみ，カントによってこの言葉と概念の厳密な使い方を知る。この著者の〈統覚〉の使い方は一般の意味の積載能力を超えていよう。あるいはむしろ趣旨からずれる事が意図されていると言った方が良いかもしれない。

「絶対的に小さな〈統覚〉」と「巨大な〈統覚〉」とを大きな二本の柱として著者が把握し示そうとするものは，カバラのようなものも含めて，古来あらゆる世界観や宗教が，人間と神とを含む全体存在を把握し表現するのに用いたものと同じ構造を持っている。それは言葉の領域に止まらない人間の比喩行動を媒介にして始めて関わることの出来る，隔絶した二つのものを含む全体性の構造である。古くて新しい課題を描写するにしては，著者の語彙の選択と用法は独自性を追求するあまりとっつきにくいものとなった。この本を読んでいると，独自性を打ち出すとはほとんどレトリックのみに関わる事ではないのかと反論したくなる。

読みにくい，分りにくいと言いながら敢えて書評の対象とするのは，この本が比喩論をテーマにしているからだ。著者の好みは〈寓意〉に傾いているが，〈比喩〉が〈たとえ・たとえる〉意味ならば，〈寓意〉の〈寓〉には〈たとえる・かこつける〉の意味があって，日本語では区別がつけにくい。どこまで厳密に寓意と比喩を使い分けているかは分らないけれども，著者の好みをそのまま受け入れ，〈寓意〉に注目してこの本を見ると，改めてこれは《寓意の書》であると言う事が出来る。用語の選び方や使い方はともかくとして，この本のテーマが比喩論である事に間違いはない。次の文章には《比喩》とその運用に関する問題がほとんど全部含まれている。

> この短章の表題にふくまれるGleichnisという語は「たとえ」のことだ。それはメタファーと対置されれば直喩と訳されるが，ここでは宗教上の寓意としての譬え話のことをさしている。(12頁)

〈Gleichnis〉〈たとえ〉〈メタファー〉〈直喩〉〈寓意〉〈譬え話〉――こんな短い文章の中で，すでに比喩に関わる雑多な言い方がなされている。雑然とか混乱とか言いたくなるほどだ。近ごろ日本でも比喩表現の見直し，というよりその本性の取り直しが盛んで，用語についても多少注意が払われるようにはなった。新書版でも『メタファー思考』(瀬戸賢一著　講談社現代新書) がある。この書の趣旨は《必須の表現手段としてのメタファー》

である。日本での比喩論の取り直しは，問題意識としてはこれより早くから行われていて，証拠の一例を挙げれば，『現代思想』5 (1981年 vol.9-5.) は「特集＝メタファー」であり，編集後記は次のように言っている。

・おそらく，人間によってかたちづくられたものはすべてメタファーにかかわっていると考えることができる。物をつくるということはそういうことなのだ。例えば，人間が手にした最初の棒は手のメタファーである，あるとき，足許にころがっている一本の棒が腕の延長として捉えられた。いうまでもなくこれは，棒と腕が同一の文脈に呼び寄せられ合体させられたということにほかならない。具体的な言語が介在していたか否かは問題ではない。そのとき人間はすでに世界を分節化しているといってよいからである。人間が獲得した最初のメタファーは道具であるということができる。このことは，メタファーという問題が文学や言語学の次元にとどまるものではない事を示唆している。それは人間の創造力また想像力に直接にかかわっているからだ。
・棒と腕が同一の平面に立つためには，棒は棒そのものであることをやめ腕は腕そのものであることを止めなければならない。現にあるものが一度否定されなければならない。メタファーは現実から一度とび離れることによってはじめて可能なのであり，そうすることで新たな現実をかたちづくるのである。人間が表現的存在であることの根底にメタファーの問題がある。それは，自分自身からとび離れる存在としての人間という問題である。

このような意味での比喩論に誘いたいのだが，上で言ったように，メタファーに関しては使われる言葉そのものに大きな問題がある。古語辞典には《比喩》という見出し語がないことを知っているだろうか。国語辞典と言えば現代日本語の辞典ということになっているが，この現代なるものは何年前まで溯るのだろうか。実態は，国語辞典と言えば第二次大戦後の日本語辞典ではないだろうか。《比喩》は五十年余りの使用歴しかないのではないか。メタファー，メトニミー，シネクドキなど，現在使われているカナ表記の語彙の使用歴はきわめて短い。便利のようだが，いつかは日本語に馴染むのだろうか。言葉による比喩行為行動は，使用言語，我々ならば日本語と切っても切れない関係にあるからだ。

他のあらゆる分野と同様，言語とその一部である比喩も，日本は二度大きな経験をしている。一回目は平安時代。十世紀の始めに勅選によって成立した古今和歌集の仮名序には，詩経の六儀 (内容上の分類である風・雅・頌と表現方法上の分類である賦・比・興の総称) を和歌に適用した六体 (そへ歌・ただごと歌・いはひ歌・かぞへ歌・なずらへ歌・たとへ歌) が説かれている。分類と適用が的確かどうかは今は問わない。これらの内「なずらへ歌(比)」と「たとへ歌(興)」に，物事にたとえ自然にたとえる歌の心と手法が見える。この二つは日本語の表現世界では本来境目のないもの，一つのものだと思う。大凡この二つを合わせたものが我々に親しい比喩表現の領域であって，六体の分類は高度に発達した大陸文化の強力な影響の結果ではあるが，成果とは言えない。日本における比喩表現のそ

の後は，とりわけ江戸時代を見れば，平安時代の分析と体系化の試みとは何の関わりもないかのように，発展し豊かになっていったことが分る。上で古語辞典には《比喩》の項がないと言ったが，その代わりをしているのが《たとへ・なずらへ・もどき・見立て・みなし》であり，微妙なニュアンスの違いを力として，広大な比喩領域をカバーしている。

二度目の経験は明治時代。今につながる強烈なインパクトを与えたのは，欧米の言語と文学であった。多くの表現技法の実例と共に，学問としての文法や修辞学が導入され，日本語とその表現法が欧米式で分析整理され体系化された。こうした一連の活動が孕む事になった矛盾に，根本的な習性の手が加えられるようになったのは最近の事である。しかしこうした活動も日本語の実際にはあまり関わりがないように見える。日々の新聞や雑誌を開けば，俳句や和歌，川柳，種々のエッセーには沢山のたとえ・見立ての表現が溢れている。科学畑では《シミュレーション》が多用されているが，《見立て》に慣れた方が良いのではないか。日本人が日本語によって自由闊達に比喩表現を展開していた江戸期のような過去には，明治期以降以上に繊細かつ包括的にメタファーを実践していたのではないか。《見立て》一つを取ってみても，一見異なる二つのものの中に同じものを認め，両者の間に新しい関係を発見する比喩行動の優れた実践と感性が見える。

完結した一つの論理は，本性から飛躍を含まない。あるレベルの論理を別のレベルの論理に関係付けるためには，はやりの言葉で言えば，シミュレーションによって飛躍の過程を我が物にしなくてはならない。最近の『天声人語』にこんな文章があった。

> 株式市場には，先人から伝えられた数多くの格言が残る。……「もうはまだなり，まだはもうなり」……「人の行く裏に道あり花の山」……「相場は相場に聞け」……「エコノミストは理路整然と曲がる」……

これらはみな可能領域と不可能領域とを，脳中の図において結び付ける言葉の魔術である。事態に相応しい比喩を摑む事によって，相場師は不可能への道程を模索する手立てを手中にする。相場師の成功も不成功も良い比喩に出会い，いかにそれを使いこなすかにかかっている。

二〇〇二年一〇月